



# 談話室

## 「10年一昔」

武田 和 三\*

Kazumitsu Takeda

私は、家庭サービスと気分転換と兼ねて、時々洋画を見に行く。

洋画ファンには蛇足ながら、タイムマシンを操り過去や未来を駆け巡る話をテーマとした映画“バック・トゥ・ザ・フューチャー”が何故か心に残っていて、会社生活30年とよく言われるが、私自身が丁度その折り返し点に到達したことでもあり、映画にあやかって過去を振り返ることにした。

表題の“10年一昔”は、ニュアンスの違いが多少あるものの、会社生活の節目で数回耳にした言葉を安直に採用した次第である。

さて、この言葉との最初の出会いは、昭和46年入社直後の訓話であった。

「目前にある最新鋭の機械は、10年程前から基礎研究を実施しており、その成果が集大成されている。

社内で扱う大型機械は、凡そこの範疇に入り、“10年一昔”と考えられる。」と記憶する。

入社後に配属された事業所の船用タービン設計課は造船景気の真っ只中にあり、商談対応で多忙な日々を送った私には、残念ながらその言葉の意味を深く考える余裕すら無く、頭の片隅に追いやっていた。

該のとおり好景気の後には昭和49年のオイルショックがやって来て、昭和53年に船用タービンの対外的な商談業務から足をあらい、本社での陸用機械の開発業務に鞍替えとなった。

二度目の出会いである。

直属の部長は、分野の異なる業務を担当する私を次のように激励された。

「どんな仕事も5年で1人前となり、10年で目処がつく。その時になれば自分の行った仕事を“10年一昔”と思えるもので、また新しい仕事にチャレンジ出来るものだ。」と。

最初にガスタービンの開発を担当した。

当時国内でのガスタービンの用途は、ピーク負荷用又は非常用発電設備として位置付けられる程度で、高

性能化、大容量化の可能性はあったが、ユーザーの評価はまだまだ蒸気タービン有利であった。

ここで試行錯誤しながら開発に参画していた時期に読んだ著名な先生の“ガスタービン人生論”の要約を紹介したい。

「ガスタービンは、機械的構成要素のみで構成された数少ないシステムであり、その要素が織りなす様々の問題は、さながら夫と妻とで構成される家庭に似ている。1本の軸で結び付けられた圧縮機とタービンは、それぞれder Kompressorとdie Turbineと表現され、この男性と女性とは燃焼器でも結び付けられ、“愛情の火”が連続的に燃えている。圧縮機には、経済性を損わぬ範囲で息抜きが許される。

ガスタービンは人間的なものであり、良い家庭を作るため人間の幅を広げる努力をするように、ガスタービンもその構成要素やシステムを改善し続ける努力が必要である。」と述べられていた。

上述のとおり、ガスタービンの構成要素やその周辺技術は幅広く研究され、この10年程の間に目覚ましい進歩を遂げている。

例えば、基礎理論はかなり以前から確立されていたと思うが、電算機の容量や計算スピードが格段に向上したことで、空力、冷却、強度等の複雑な設計計算が可能となり、低NO<sub>x</sub>燃焼技術、新素材、新製造技術等を用いてガスタービンの高性能化、高信頼性、大容量化が達成されたと考える。

今日、ガスタービンを中核とするコンバインドサイクル発電システムが省エネルギーの旗頭として認知される所となり、正に“10年一昔”の感慨である。

このガスタービンとも昭和63年にお別れして、昨年より環境保全という新テーマに取り組んでいる。

現在頭の中をリフレッシュさせながら、構成要素にシステムにとあれこれ思案する毎日である。

開発に付き物の時間のズレがあると思うが、次の節目を迎える時に新たな“10年一昔”を感じ取れるよう“ガスタービン人生論”を手本として、公私両面で幅を広げる努力を続けたいものである。

\* 三菱重工(株)原動機事業本部新製品開発部主務  
〒108 東京都港区芝5-34-6 新田町ビル